

# 戸破の歴史を訪ねて

## 越中国対水郡戸破村ノ事ナド (その二)

戦国時代、天下統一を目指す織田方の北国攻め(柴田勝家を総大将とし、前田利家、佐久間盛政など)に対し、上杉方に与した越中国願海寺城主寺崎民部左衛門父子は、天正九年(一五八一)信長から江州佐和山へ召し出され、信長の下臣丹羽長秀に預けられ、子細吟味これあり、切腹を命ぜられた。その時の様子を「信長公記」は次のように記している。

七月一七日、佐和山にて、越中の寺崎民部左衛門・子息喜六郎父子生害の儀、仰せ付けられ候。息喜六郎、まだ若年十七歳、眉目・形尋常にうつくしく生立ちたる若衆に候。

最後の挨拶、哀れなる有様なり。色体これありて親の先に立つ事、本儀なりと候て、父寺崎民部左衛門腹を切り、若党介錯仕り候ひき。其の後、喜六郎父の腹切つてなぐる、血を、手に請け嘗て、我々御伴申すの由候て、自ら尋常に腹を切り、比類なき働き、目も当てられぬ次第なり。

能登国守護畠山氏の居城七尾城は、天正四年、上杉謙信に攻められ、天正五年(一五七七)九月落城したが、半年後の翌天正六年三月、謙信が春日山城で急死した。その後七尾城は、一時畠山氏の旧臣温井景隆が領有したが、織田方の攻めに抗しきれず、景隆は七尾城を信長に献じ、一たん越後に退いていたが、天正十年(一五八二)六月二日、信長が下臣明智光秀の謀反により本能寺で横死したのをうけ、父祖伝来の能登の旧領を奪回すべく、上杉景勝の援を



七尾城址 温井屋敷跡

得て天平寺の僧徒とともに石動山・荒山若で壮絶な戦いを繰りひろげたが、利あらず、織田方の前田利家、佐久間盛政に敗れ、討ち死にをした。

景隆の子、景久は戦乱の世を流浪し越中へ逃れ、寺崎民部左衛門の遺臣草野大学・倉地孫之進らと議り、子久助とともに手崎、戸破の地を開墾し、帰農・土着した。

久助屋敷は、手崎加茂社西北方の北手崎若宮割にあつた。

久助は江戸時代後期、二塚村へ移住し、十村大坪家の分家に任せ、菅袋地内の開墾に従事した。

手崎の地名は、手良崎が転じて手崎になったとか、願海寺城の大手口であったことから大手崎になったとも伝えられている。

(温井喜彦・富山県郷土史会会員)